伯和西爾時報

發行所 伯剌西爾時報社
電話 七四六七〇

社長 石井清作
Director M Sameshima

購讀料 一ヶ年 六十圓
半ヶ年 三十圓
廣告御用は御社會へ御問合せ

珈琲 サントス四級 十キロ ノミナル 一七〇〇〇
珠 一二〇〇〇

爲替 對日 四、六六五
郵便送金 五六七〇
對米 一九、七七〇
對英 八〇、〇〇五〇

# 國家元勳最後の一人 西園寺公望公遂に薨去せらる

## 畏くも 國葬送營の件御裁可あらせらる

（東京廿五日同盟）西園寺公望公は二十四日午後九時五十四分遂に薨去した

【東京廿五 同盟】今月初旬腎盂炎を病み臥床以來主治醫勝沼博士等の必死の看護と嗣子八郎氏等近親の平癒祈願も遂に空しく、元老西園寺公望公は廿四日午後九時五十四分九十二歳の高齢、巨木の崩れる如く薨去し、一世紀に亘る絢爛たる生涯の幕を閉じたのである

【東京廿五日同盟】天皇陛下にぶかせられては西園寺公生前の勳功を嘉せられ、畏くも政府の國葬送營の件を御裁可あらせられ、廿五日特に左の勅書を賜つた

故從一位大勳位公爵

西園寺公望

特に國葬を賜ふ

御名御璽

昭和十五年十一月廿五日

内閣總理大臣 近衛文麿 副署

御用掛兼治維新以來臣下にして特に國葬の禮を賜はつたものは岩倉具視、島津久光、三條實美、毛利元德、島津忠義、伊藤博文、大山巌、山縣有朋、松方正義、東郷平八郎の十名である

【東京廿五日同盟】元老西園寺公薨去の報に政府は生前の公の輝かしい勳功に報ひる爲め愼重考究中であるが近衛首相は廿四日深更、富田書記官長と協議、廿五日の閣議に國葬令に依る勅書奏請の件を附議した上、近く宮中に參内委細奏上後御裁可を仰ぐ事となつた

## 故西園寺公 往事の逸話

【東京二十五日同盟】西園寺公は早くから兩親の膝下を離れ、幼にして當主となつたので、相當我儘だつた、十二、三の少年の頃から茶器などをいぢり廻した程早熟だつた、療婦の相模と云ふのは男勝りで、美丸と云はれた維新劇に活潑として活躍の指揮に依り美丸少年性來のキカヌ氣に益々拍車を掛けられた、當時公爵の社會では家格に應じて朝廷の儀式的の事を多く學ぶ風習があつたが、公はそんな事は嘗えた處で仕方がないと騎銃の稽古など初め出した、こう云ふ精神こそ公の一生を貫く處のものであり、フランス留學當時、自家詩文社創設などおよそこの精神の發露に外ならぬ、公は明治三年十二月宿望が叶ひ憧れのフランスへ旅立つた丁度その頃パリー、コンミューンの叛亂が起つた、之は急進的なプチ・ブル階級及び勞働階級からなるパリーの國民軍と反動的な政府軍との間の

## 生前の勳功嘉せられ 從一位に追陞せらる

【東京廿五日同盟】畏き邊りでは、故西園寺公生前の勳功を嘉せられ、廿四日附左の如く從一位宣下あらせられた

故正二位大勳位公爵 西園寺公望

叙從一位

特旨を以て位一級追陞せらる

## 儀式などどうでもよい 擊劍を始め出す

## 國葬は 一週間以内に執行か

【東京廿五日同盟】故西園寺公の國葬の日取り、式場等に就き、政府は廿五日の持廻り閣議で協議の結果、大體左の如く内定した

一、葬儀の日取り、大體一週間以内に執行

一、式場、東京日比谷公園

一、葬列、東郷元帥の先例に倣らつて御二輦御金より支出とすること

## 遺骸は 外務大臣官舍へ

【東京廿五日同盟】故西園寺公の葬儀は國葬を以て執り行はれる御であるが、公の遺骸は東京に適當の家が無い爲め外務大臣官舍に移すことに決定した

## 今週の人

## 建川大使の横顔

建川美次中將が、駐ソ大使に赴任した。適材適所であるかどうか、將軍自らが證明することと思ふが、有爲の豫備軍人が、國家の必要に應じて軍事以外の仕事に携はることは近衛公の統帥權と政治との關係を調整しようとする新體制の趣旨とは、直接に關係はないにせよ、さうした雰圍氣を作るには、何等かの役目を果すことであらう。一般に私たち社會人が、軍事に理解の乏しいのは、困るものだが、軍人が社會とよく接觸を持つのは、軍事理解の助けとなるに違ひない。

彼が、非常に優秀な武人であつたことは、今もなほ語り傳へられる、日露戰爭の時の敵中三百里徒歩旅團の華々たる武勳によつても知られるのである。當時中尉だつた將軍らの一隊は敵の側面を大迂回して背後に入り込み、敵の行動を細かに偵察しつつ、九死に一生の危險境を脱出して、情報を本隊にもたらした。これが露軍に決定的の大敗北を喫せしめた有力なる原因となつたことは申すまでもない。この戰功によつて、中尉の階級としては、異例の功四級の金鵄勳章を授けられた。

この勳功が物語るやうに、將軍の閲歴は純武人として軍令系統に終始したのであるが陸軍大學の研究題目が「軍事と社會」だつたといふのでも知られるのである。この題目がすでに今日の總力戰の意義を暗示してゐる。今日の戰ひが、武人のみの戰ひではなく、その國の持つ一切の外交力、經濟力、文化力、道德力を綜合した戰ひであることは、現にわが國が戰つてゐる支那事變や、ヨーロッパの戰爭が例示しつつあるところだ。これらの總力關係を、軍事的の立場から見れば、軍事と社會との關係にほかならないのである。

野戰攻防の武人でなく、情報中樞に出した外交、政治に關する智識だと稱せられるのは偶然ではないのであつて、いはば、彼が近代的武將たることを示すものなのである。近代軍人は何人も、一通りの政治、外交に渉る知識を要求されるが、建川將軍はこの方面の造詣が深かつた。その副業的の知識が、外交官として、お國の役に立たうとする、將軍としては多少の感慨なきを得ないだらう。

建川新大使は、命を受くるや、要するに日ソ親善さと、紋切型のやうにして物語つてゐるが、西園の狀況は必ずしも紋切型ならぬあるものを感じさせる。以下は全く本文の筆者の空想だが、假りにわが國が、南方政策を强行しようとするならば、總力戰の原則によつて、外交關係の調整を調節して置く必要がある。四方の國がスキがあつたら、何時攻めて來るかわからない狀態の下では、安んじて南方政策に專念するわけには行かないであらう。さうした意味で日ソの外交關係を統べれば、これまでと多少違つたものがありさうだ。

建川將軍の人間としての成長は、酒の量と等比級數的に進展してゐたやうである。彼は中學生にして秀才のほまれがあつたが、中學生にして朝酒を引つかけて登校する酒界の猛者でもあつた。自來、酒を愛するが如く、酒をも愛し給へ。

## 故公の遺志により 元老制は茲に終焉

ここに名實共に終りを告げる事となつた

## 臨終模様 嗣子八郎氏は語る

【興津二十五日同盟】西園寺老公と最後の對面をすました養嗣子八郎氏愛嬢愛子、秋子令孫公一、秘書原田熊男男乃び主治醫の勝沼博士の五氏は二十五日午前一時二十分悲しみの坐漁荘を辭して水口屋へ引き揚げたが、坐漁荘には養女の奥もと子、熊谷執事、おあやさんの四人が老公の枕頭に侍つて公の遺骸を見凝つてゐる、嗣子八郎氏は水口屋で言葉少く語つた

誠に恐るが如き大往生であります、動揺が見えられた時には意識も極めて明瞭であつたが、日暮頃から容態が次第に惡くなりましたが現に角出來るだけの手當を致しましたが終に遂事終りとなりました

## 燦たる功績偲ぶ 故西園寺公の略歴

【東京廿五日同盟】故西園寺公は嘉永二年十月德大寺公純の次男として生れ、西園寺師季卿の養子となつた、明治元年戊辰之役には十九才にして山陽道鎮撫總督となり、次で第三等陸軍參謀として會津に出征、明治三年フランスに留學、在佛十年新智識を得て、同十三年歸朝東京自由新聞を發行、十七年公爵を授けられた、特命全權公使としてオーストリア、獨逸兩國に駐在、歸朝後貴族議員總裁、廿七年樞密顧問官、文部大臣、廿八年外務大臣、卅一年文部大臣、卅三年枢密院議長、卅四年再び内閣總理大臣臨時代理、即付内閣總理大臣臨時代理仰付

## 汪主席代理 令孫宛弔電送る

【南京廿四日同盟】西園寺公薨去の報に、國民政府在代理主席は、取敢ず謹て和平同志として親交厚い老公の令孫公一氏宛て悲痛な弔電を發し衷心より哀悼の意を表した

## 近代日本政治建設の大功勞者 國民政府 林宣傳部長語る

【南京廿四日同盟】國民政府宣傳部長林柏生氏は、西園寺公の訃報に接し、國府朝野に代つて次の如く哀悼の言葉を述べた

西園寺公爵は、日本の元老であり、日本近代政治建設殊に憲政上の重要な地位を占めてゐられ、その功績は實に偉大にして、世人の尊敬服せる處である。今次不幸なる事變發生以來、公の計畫に接し、國府朝野に哀悼の意を表した

## 眠るが如き大往生

【興津廿五日同盟】西園寺公臨終の模樣に關して 勝沼、中村兩博士診斷の結果を廿五日午前零時四十五分次の如く發表した

臨終に至り增加の傾向を認められる呼吸が、夕刻上り急に增進す、脈搏も增加一般の疲勞狀態加わて顯著なり、九時に至り凡ての手當もその効を奏せず、遂に危篤となり、九時五十四分眠るが如き安靜なる臨終に入らる、當初の腎臟膀胱炎消退せるも、疲勞減少恢復を見ざりしものと診斷する

## 原料、販賣兩面に 鐵鋼業の强力統制が切要

陸海軍と協議 商工省で立案中

【東京二十五日同盟】商工省では日本鐵鋼聯合會を基礎として更に强力なる綜合的統制機關を設置する方針のもとに、左の如き案に副つて統制機構を確立すべく官民の連絡機關を新設することゝなつた、即ち新興統制團體は鐵鋼製作の最高執行機關として事業交渉及び鐵鋼投資協議會の支持の下に原料割當に關する命令製品配給統制等鐵鋼に關する綜合的統制を行ふ、然して其の傘下、會長には獨裁權を扶與する

一、統制團體は鐵鋼製作を一元的統制團體として傘下に原料統制、販賣統制機關を當つ即ち原料關係に於ては鐵鋼石、銑鐵、屑鐵、製鐵原料の再給統制機關として現存の基本鋼鐵原料統制會社を母體に日鋼鐵鋼販賣會社日本鐵鋼統制會社を包含する新機關を設立し、一方鋼材の配給統制に關しては現在の日本鋼材販賣會社大日本鋼管販賣會社を併合して配給一元機關たらしめる

## 果然大西洋上に獨艦活躍 英國大商船隊猛擊喰ふ

### 大型汽船海底の藻屑となる

【倫敦廿四日發】UP電によれば、獨逸軍艦は最近大西洋上に於て大活躍を開始したので當地海運業者間に大恐慌を來してゐる、昨二十三日大西洋の眞中に於て英國大商船隊は獨逸軍艦の發見する處となり猛砲撃を浴びせられて大型汽船ポートオボルト號は遂に撃沈された、他の若干船舶も相當損害を蒙つたものゝ如くなるも詳細不明なり

## 南大臣を歴任して戰爭終結の大任に當つた、四十四年再び内閣を組織、大正七年大勳位に叙せられ、大綬章を授けられ、大蔵大臣を臨時兼任、その後伊藤博文公をたすけ立憲政友會を起し、伊藤公の後を受けて總裁にあげられ、卅九年内閣を組織、外務、文部

## 政治建設の大功勞者

## 眠るが如き大往生

## 獨逸軍艦活躍 大商船隊猛擊喰ふ

## 大型汽船海底の藻屑となる

## 原料、販賣兩面に 鐵鋼業の强力統制が切要

## 陸海軍と協議 商工省で立案中

## 汪主席代理 令孫宛弔電送る

## 近代日本政治建設の大功勞者

## 國民政府 林宣傳部長語る

## 先づ官民の連絡機關設置か

## 畏くも 國葬送營の件御裁可あらせらる

## 故西園寺公 往事の逸話

## 生前の勳功嘉せられ 從一位に追陞せらる

## 儀式などどうでもよい 擊劍を始め出す

## 國葬は 一週間以内に執行か

## 遺骸は 外務大臣官舍へ

## 今週の人 建川大使の横顔

## あばれ大名（映画化）

（三百六十）（どくろ船）

盛衰一路（一ノ六）

久我莊多郎 作
藤秀彌 畫

かうまでの眞心をさゝげて來る女性に、一時のがれの嘘を掴てゐることには氣がつかずをふことは、かれの良心が許さない。といつて、今日まで彼の抱いてゐた心持を、こゝであからさまに話したならお由良は、ゆめ〳〵生きてゐないだらう。死を選ぶのは、當然のことである。

それは、避けてやらねばならないし……。

いや、彼が現在の心の奥を覗つてみれば——かくまでに可憐しい熱涙を流す女を見れば、大三郎の若い心は知らずつとえる！ だが……」

「……」

「だが——その目的を達するまでは、あらゆる人の世の憾みは、おのれは大事を持つしみには振り向かぬ覺悟をし身であるといふ理性が、彼をてゐるのだ。戀にも、名利に身を伏して、また、身も世もなく、啜り泣きに泣いた。

いつか、大三郎はそのふところへ、無すまじき醜の女を抱てゐることには氣がつかず、つとめて沸る血をしづめようとする。

「しかし——お由良」

「——はい」

「わしの言葉も聞いてくれ。貴女も知つてのとほり、わしは幼時から二十年近く、たつた一つの目標に向つて進んで來た。そのためには、數多の苦難、迫害にも會うて來た。

「だが、わしは、あくまでひるみ上に於て大活躍を開始したので當地海運業者間に大恐慌を來

「——そなたの心を話されてからこれを打ち明けるのはつらいことだが、雨崎屋をあの雨崎屋徳兵衛を討ち果すまでは……父をはじめ徳兵衛のために修羅の底へ突き落された人たちの、妄執を晴らすまでは、」

「あ……」

お由良は、不意に、胸へ氷を當てられたやうに、

「大三郎さま。それを仰有つて下さいますな。徳兵衛の名を聞かされしば、わたしは、血にもあなた様の、お側を去らねばられません」

と全身に、激しい震慄を起すのである。

一歩手前で、辛くも踏みとどまらして、

「——お由良さん、思ひ違ひをするではない。この大三郎は決して、そなたを忌とうてはゐるのだ」

と、遂に、かういつてしまつた。

「どうぞ、ほんとのことを、聞かせて下さいませ。大三郎さまッ！」

と、縋り泣しては、もう目に涙もなく、生死の境に立つたやうな、森嚴な覺悟をもつて問ひつめてゐるお由良は、

「——この大三郎は、そなたを忌とうふてはゐないのだ」

といふ、戀しい人のまじめな言葉を聞いて、

「おゝつ！」

ヒタと、膝へついた。

「それは——それは、眞實のことでございますか？」

「眞實、わしは貴方を、憎めない」

「う、うれしうございます……」

お由良は、ガバと男の膝へすがるのである。



もし心奪はれぬと誓ひを立てゝゐるのだ」

「苦しい！ 女のひとすじなる情を知つてゐながら、身を投げ出して、愛撫を待ち兼ねてゐる若い肉體がそこにあると知つてゐながら、これを言はねばならぬ苦しさよ！」

大三郎は、しざりにみだれた懷紙の端を咬いて、つぶやけた。

「——そなたの心を話されてからこれを打ち明けるのはつらいことだが、雨崎屋をあの雨崎屋徳兵衛を討ち果すまでは……父をはじめ徳兵衛のために修羅の底へ突き落された人たちの、妄執を晴らすまでは、」

「あ……」

お由良は、不意に、胸へ氷を當てられたやうに、

「大三郎さま。それを仰有つて下さいますな。徳兵衛の名を聞かされしば、わたしは、血にもあなた様の、お側を去らねばられません」

と全身に、激しい震慄を起すのである。

# 佛印に肅清の嵐吹き荒ぶ

## 不純分子を一掃

### ドクー總督の英斷下る

【ハノイ二十五日同盟】ドクー佛印總督は去る十九日ベーベル支那總督、ツーゼ・ラオス長官以下を一齊に逮捕、植民地派ドゴール系の一味に乘り出したが同總督の佛印内部肅清は愈々嚴烈を極め、ハノイ總督府部内に於て徹底的に反蒋派と目されてた勞働長官ピントルベールを二十日罷免、身柄を拘留すると共に、更に財政長官カゾーの家宅捜査を行ひ、ドゴール派との確證を得て、同長官並に西貢派遣員ホンターンを拘禁。

警察當局で嚴重追究中である、同長官はユダヤ財閥英米勢力と結托し、ドゴール政府直接の指令により總督部内の攪亂を企圖すると共に、腹心のホンターンを西貢に派遣、同地に於ける反ダイシー策動を行つて居たものである、また嚴に罷免されたベーベル支那總督及びツーゼ・ラオス長官は二十三日、西貢出帆で本國に送還された

總督は廿四日コンミュケを以て同事件は共產黨の使嗾に依るものと見られると發表した

【ワシントン廿三日發】レオン・ヘンダーソン米國國防委員は亞鉛の增產につき左の如く語つた

# 北米の亞鉛生產增大

米國の亞鉛生產はこゝ數週中に增大することと思ふが亞鉛精鍊能力擴充案はすでに立案濟みである

# 佛印に擾亂事件

## 安南人暴徒暴れる

### 背後の黑幕は共產黨か

【ハノイ廿四日同盟】バラオ淡水間無線水試驗飛行の綾波號は、二十五日午前五時二十分バラオを發つた、この朝南洋廳主催の壯行會が空港で行はれ、全洋の官民夜半から集つて待機する、驗で岡野機長以下乘組員十名と六名の新聞通信特派員が到着、河野飛行場長、南洋長官代理中村拓殖部長の激勵の辭、岡野機長の挨拶、乾盃の後、綾波號は官民の歡呼に送られて鮮かに離水、爆音勇ましく二千八百キロ翼破の壯途に就いた

# 一路淡水へ！

## 「綾波」號發つ

### 盛大を極めたサイパンの壯行會

【バラオ廿四日同盟】バラオ淡水間無線飛行の綾波號は、二十五日午前五時二十分バラオを發つた、この朝南洋廳主催の壯行會が空港で行はれ、全洋の官民夜半から集つて待機する、驗で岡野機長以下乘組員十名と六名の新聞

【ワシントン廿三日發】當地UP電は、米國々務省職員の談として米政府は、印度支那ハイフオンに於ける日本軍の米國副領事ロバート・リンデン並びにUP通信員メルヴィル・ジャコブの二名留置事件に就き、日本政府宛嚴重抗議を發した旨、報道してゐる

# ハイフオンの米人留置事件

## 日本政府宛抗議發す

### 米國々務省職員の談

【ワシントン廿三日發】當地UP電は、米國々務省職員の談として米政府は、印度支那ハイフ

# 文部省推薦映畫

【東京發】文部省では劇映畫「風の又三郎」（日活、十卷）を藝術的氣品の高いもの、また詞「明小姐」（新興、十一卷）を娯樂映畫として健全な方向を示したものと推薦した

# 文化映畫の提携

## 日獨伊交換制實現

【東京發】日獨伊間提携成立を機會に三國の映畫提携緊密化が豫想されてゐたが、日伊映畫提携が日本伊太利輸出入組合及び駐日伊太利大使館の斡旋で急速に具體化するに至つた。これはミッパ貿易映畫部が「或日の干潟」「日本の敗」三部曲等八本の文化映畫を輸出しこれと交換で伊太利からムッソリーニの令息ヴイットリオ・ムッソリーニが監督したアキラ映畫「飛行家ルチアノ・セルラ」を輸入して日獨兩國に配給する協定が成立したものであり、さらに日下日本文化の紹介映畫製作のため來朝中のエルヴイン・トクノスケ・ベルツ博士も日獨映畫提携の使命を帶びてゐるのであるからこゝに東京、伯林、羅馬の映畫機構が確立されるわけである

# 理科生徒の增員

## 先づ五高校から

【東京發】科學振興の時代的要求に應じて文部省では科學者の養成に力を注ぐことになつてゐるが、その第一歩としては先づ高等學校理科生の增員を行ふことで決定、來年度から官立高校五校で從來の文科一學級を理科に編成替へすることにきまつた、編成替を行ふ高校はいまだ文科三學級、理科二學級であつた水戸、弘前、高知、姫路、廣島の各校で、これを文科二學級理科三學級にしようといふ計畫で、これによつて增員される目然科學者の卵二陣は一年に一學級四十名づつ五校で合計二百名となるわけである

# 滿洲の鹽湖底に硫酸曹達の大寶庫

## 大陸科學院調査隊の副產物

【海拉爾發特電】滿洲國政府では未開の寶庫昨偽員會（興安北省）の資源開發のため大陸科學院及び地元省公署より數班の調査隊を組織し目下各種の資源調査を行つてゐるが新巴爾虎左翼旗西北方の貝湖を調査した大陸科學院吉村、川上兩博士等の一行九名によつて世界に類のない硫酸曹達の層が發見された、場所は滿洲最大のラマ廟として知られる甘珠爾廟の西北シャリボクといふ部落に近い無名湖で廣さ二平方キロの湖水の底が二メートル余の厚さの硫酸曹達の層をなしてゐる

その埋藏量は數千万トン、價格は一トン百円と見て數十億円といふ大變なもので、從來世界最大といはれてゐたソ聯バイカル湖附近の硫酸曹達層などをはるかに凌ぐものと見られ、これが開發を見ればパルプ、ガラスその他の工業原料として役立つばかりでなく硫安として非常時下の日滿兩國に絶大な貢與をなすわけである

# 二千萬弗の借款

## 米、伯間に成立す

### 廿三日ワシントンに於て

【ワシントン廿三日發】ブラジル銀行總裁マルケース・ドス・レイス氏は、今日の借款問題監督局長ジェッス・ジョンズ氏との會談に於て、豫て傳へられてゐた米國の輸出入銀行による對伯二千万ドルの借款供與を成立せしめた、御

この會談には、該輸出入銀行總裁も出席した

# 東亞經濟懇談會

## 第一回總會の幕開く

### 日滿華五百名の士集ふ

【東京廿五日同盟】東亞共榮圏確立に關する經濟的聯繫協力方策を協議すべき東亞經濟懇談會第二回總會第一日は廿五日午前九時より東京帝國ホテルに開催、日本側より石黑、村田、小川各大臣、前思一、有馬頼寧、八田嘉明、平生釟三郎、伍堂卓雄、小倉正恒氏、滿洲國側より韓總務廳長官、玩駐日大使、中華民國側より傅總務部長、李租虞何庭流、袁愈、黃東海、譚培柴、陳召維、趙泉孫、臺古聯合自治政府側より蒙財政部長武藤孝平等の諸氏他、日滿華蒙の各政府關係者並に同會員及び有力民間產業人等約五百名出席の下に開催され、東亞經濟體制確立に關し協議を盡げて散會した

# 農業の國勢調査

## 來年一月實施に決る

### 日用品配給の圓滑期す

【東京發】農林省では國民の日常生活必需品配給を円滑にするため農產、水產物等の調査統計を實施すべく先頃から近藤統計課長、長畑統計官等が資源調査法第一條に基づき農林統計規則を研究中であつたが漸く成案を得たので近く公布し、來年一月大豆、味噌醬油、木炭等につき大掛りな調査を行ふことに決定した、生產地、卸小賣商の倉庫から旅館、工場、寄宿舍等大口消費者の手持量まで調査するもので、新規則は生產者及び農家に報告義務を持たせる强制的なもの、調査範圍も全國的に亘り、細部たる農業國勢調査となつてゐる點が注目されてゐる

# 街頭の書店から姿を消す"虎の卷"

## 中學受驗準備書絶版に決る

【東京發】文部省では街頭に氾濫する中學入學受驗準備書が誘發し新考査の趣旨に副はぬ點が多く兒童及び父兄に少からぬ影響を與へてゐるのに鑑み內務省と連絡をとり準備書を發行してゐる出版業者十一名を內務省に招き圖書課普通學務課關係官が出席、この際、斯る出版物を絶版するやう勸告、業者側も當局の意圖を諒として絶版、店頭から速かに引つ込めることになつた、これらの出版物は概して口頭試問に關するものが多くいろ〳〵の試問を豫想してその横斷的な答へ方を書いたものであり、なかには"これ一冊で父兄も安心"などと誇大なサブタイトルをつけたものもある

檢査に"虎の卷"は德性考査「口頭試問の要點」「身體試驗の受け方」「模範口頭試問」等十四種類である

# 新駐獨ソ聯大使に

## デカノゾフ氏任命

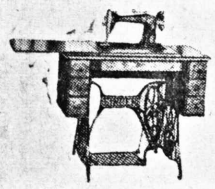
### 現大使に歸國命令下る

【モスクワ廿三日發】AP電の報ずる處に依れば、タス通信社は、ソ聯政府は外務人民委員會委員デカノゾフを新駐獨大使に任命し、現駐獨大使シゲアルツセフ氏は歸國を命ぜられた旨、報じてゐる


よくきく、のみやすい
肝油ハリバ

美術石版印刷
鹽谷實
聖市タバチンガーラ街
郵區二五七番
電話三一三九八〇

Dr. Friedrich Müller
R. Barão Itapetininga, 50, 7º
耳鼻咽喉科專門
頭痛、鼻潰瘍、整形外科、三十年の經驗あり
診察平日午后二時半より六時迄、土曜、九時より午后三時迄
電話四一九七四〇
平急八一二五九三


新式四カペタ型
一臺あります
御望みの方は
御來社下さい
時報商事部

新申込
（新聞新購讀）
社告
日伯兩語で住所姓名を御明記下さること
轉居
郵函變更
發送方法變更
等を通知下さる時は必ず新舊共に住所姓名を御明記下さる樣以上御願まで
伯剌西爾時報社
發送部

中古シンガーミシン

麵のもと……一ビン五銭
麵……一キロ七銭
時報商事部

R. Monteiro & Cia
CASA MATRIZ E ESCRITORIO
Rua 25 de Março, 533
Caixa Postal, 1646 - Telephone, 2-4388 - São Paulo
Casas Filiais:
Rua José Bonifacio, 43
Esq. Bocayuva
Telephone 2-5510
Rua 15 de Novembro, 12-18
Telephone 2-1781
Av. Rangel Pestana, 1475
Telephone 2-9837
Casas Filiais:
Rua Boa Vista, 199
Telephone 2-3688
Santos
Rua Gen. Camara, 79
Telephone 5657
Rio de Janeiro
Rua Uruguayana, 106
Telephone 23-5067
IMPERIAL CASIMIRA
MARCA REGISTRADA
◆弊店は伯國最大の反物店で內外優秀のカジミーラを豊富に仕入れて居ります
◆尙歐洲よりブリン、麻、パームビーチ、トロピカル等本年夏向きとして種々多量に仕入れました
◆アズールマリニョのタルジア地一米十八ミル以上
◆弊店は國產優秀カジミーライムペリアルの總代理店
◆地方より御出聖の折は是非御來店の程を
◆尙地方へは見本をお送り致します

BANCO AMERICA DO SUL LTDA.
CAPITAL 1.000:000$
支店
1 アラサツーバ
2 マリリア
3 バストス
4 チエテ
5 オウリニョス
6 プロミッソン
7 プルデンテ
8 パウルー
9 パラグアスー
10 ランシャリヤ
11 ポンペイア
12 リベロンプレート
13 リンス
14 ロンドリーナ
15 リオプレート（明年二月）
南米銀行
お引立と希の上ぐ
特種定期
積立據置
利子毎月拂
是非御利用を
一般預金
定期 年六分
小口當座 四分
普通 〃 二分
送金
國內直接
御里取次
其他
食糧
手形割引
手形取立
本店 サンパウロ＝PRAÇA DA SÉ, 393. CAIXA POSTAL 555.

カーザ東山
CASA TOZAN, LIMITADA.
S. PAULO ..... Rua Florencio de Abreu, 308-314-318-322
C. Postal, 528 Tels. {3-1141 3-1142 / 3-1143 3-1144}
SANTOS ..... Praça Mauá, 25 C. P. 911 Tel. 2106
RIO DE JANEIRO Rua São Pedro, 63 C. Postal, 3342 Tel. 23-4031
LINS ..... Av. Voluntario Rosalino Silva, 147 C. Postal, 11 Tel. 240
MARILIA ..... R. 9 de Julho, 1277 C. P. 74 Tel. 460
P. PRUDENTE Rua Tenente Nicolau Maffei, 36 C. Postal, 17 Tel. 300
PROMISSÃO ..... Rua Julio Prestes, 1057 C. P. 16 Tel. 50
GUARANTAN .... Estação Guarantan — N. O. B.
ALV. MACHADO Est. Alv. Machado — E.F.S.
東山銀行
CASA BANCARIA TOZAN, LTDA.
伯貨定期預金 年六分
Santos - S. Paulo - Lins - Marilia - P. Prudente


# 伯國製鐵工業雜觀

鈴木貞次郎

（三）

（千九百十九年ウイルソン大統領の下に內務長官をしたフランクリン・レーナは

「現代の國家は鐵が無ければならない」

と云ひ

「若し鐵が無ければ如何にしても鐵を得る方策を講ずる必要がある」

と喝破した如く、ブラジル歷代の大統領に取りて製鐵工業は國家の重要問題とされ、絶えず努力して來た所である其の內で最も輿論の目標となつたのはイタビラ鐵山の問題である。此鐵山はミナス州イタビリト郡內のコンセタソンとエスミリール鐵鑛山であるが俗にイタビラーイロンと稱されて居る。ブラジル最大の鐵山はサンタ・バルバラにあるもので埋藏量八十億万噸を有し、イタビラーイロンは第二位で三億九千六百万噸の埋藏量ありと稱されてゐる。如何に豐富な鐵山であるかを云つて見ると此イタビラーイロン鐵山一つで日本の全埋藏量の約五倍に達するから驚かされる。

千九百五年と云ふと私がリオに上陸した前年に當る、ダイヤモンドや金を買つて一攫千金を目的でリオ港に下船したロベルソンと云ふ英人があつた。

（彼は）

かう云ふアドベンチーアな取引に依つて大儲けをなしアウストラリヤに行つて牧羊しつゝ暮らかに餘生を送りたいと云ふのがプランであつた、彼は直ちにミナス州の奥地に這入つて三ケ月間旅行した、絶間なき懸命な努力も豫期した寶石や金を得ることが出來なかつたがその代りに多數の鐵鑛見本と地圖や寫眞を携えてリオ市に戻つて來た、そうして當時下水工事を請負つてゐるシチー會社支配人ゴートーに見せた。

「自分の考ふる所ではこれは世界に於て稀に見る豐富な鐵山である、何故に今日迄手をつけて居らないか不思議である」

と談つた、彼は當時アウストラリヤの牧羊者たる希望を中止し或計劃を抱いてロンドンに引返へした、まもなく他の一英人がロンドンから渡つて來てゴートーと共にミナスに急行した、云ふ迄もなくロベルソンの指示した鐵山を買收するためである、彼等はまるで一アルケル百ミル鐵道のタダの樣な値で其邊一帶の土地を買ふことに成功した、そうして今度はゴドー自身ロンドンに行つた

（發見）

者のロベルソンとどんな分配をしたか知らないが、とにかくそれは途方もない高價で買つてしまつた、これを買つたのは英國最大の財閥ロテッシリーやペーリング・ブラザー等の出資になるItabira-Iron Ore Co. Ltdと云ふ新たに組織された會社であつた、これが外國に於て組織された會社でブラジルの鐵山をエスプロラした最初のものである

此の鐵山はリオ・ドーセ地帶にある關係上鐵石をエスピリート・サント州のヴイットリヤ港に運搬することが殆ど絶對的に必要とされる。千九百九年から此の地帶に開通してゐる鐵道はEstrada de Ferro Vitoria a minasと云ふので、ヴイトリヤを起點としてミナス州サンジョゼ・デ・ラゴアを經てゐる、この鐵道會社に對し政府は製鐵業發達を理由として、年々三百万噸の鐵鑛輸出に對し一噸一キロメートル八レースの運賃を割引し電化した一キロメートル當りの費用金貨二十四コントに對する年七分の利子を保證した

（かう）

云ふ有利な補償契約の內容を知ると同時に拔目のないイタビラーイロン會社は直ちにヴイトリヤミナス鐵道會社の株券の大部分を買收してしまつた、即ち會社は二つであるが其の實は一つであると同一の結果になつたのである

（ハノイ廿四日同盟）去る廿二日深夜サイゴン地區に安南人暴徒が突如銃劍で武裝し、サイゴン周邊各所に於て佛印軍警備隊屯營所を一齊に襲撃したので、警備隊は直ちにこれに應戰すると共に警官隊を出動せしめ鎭壓に努め、叛徒を逮捕した、右事件に關し、佛印

# 滿洲の鹽湖底に硫酸曹達の大寶庫

## 大陸科學院調査隊の副產物

【海拉爾發特電】滿洲國政府では未開の寶庫昨偽員會（興安北省）の資源開發のため大陸科學院及び地元省公署より數班の調査隊を組織し目下各種の資源調査を行つてゐるが新巴爾虎左翼旗西北方の貝湖を調査した大陸科學院吉村、川上兩博士等の一行九名によつて世界に類のない硫酸曹達の層が發見された、場所は滿洲最大のラマ廟として知られる甘珠爾廟の西北シャリボクといふ部落に近い無名湖で廣さ二平方キロの湖水の底が二メートル余の厚さの硫酸曹達の層をなしてゐる

その埋藏量は數千万トン、價格は一トン百円と見て數十億円といふ大變なもので、從來世界最大といはれてゐたソ聯バイカル湖附近の硫酸曹達層などをはるかに凌ぐものと見られ、これが開發を見ればパルプ、ガラスその他の工業原料として役立つばかりでなく硫安として非常時下の日滿兩國に絶大な貢與をなすわけである

# 明年度聖州豫算

## 百萬餘コントスに達す

パーロス執政官の命に依り、州行政院に於てプリニオ、ロドリゲス氏主班となつて編成中だつた一九四一年度聖州政府豫算案は略完了したので、近日中に檢討の上、公布されるものと見られてゐる、即ち聖州政府明年度歳入、歳出豫算總額は實に百万コントスを突破し、百〇一万八千百四十一コントス四百八十三ミル四百レースに上つてゐる

内訳　經常部――八十八万八千五百十コントス七百五十九ミル三百レース
臨時部――十二万九千六百三十コントス七百廿四ミル百レース

## 寒心事

### 明日の伯國のために散らすな若き力！

### 聖市の死亡者……二十歳以下が斷然多い

昨年中に聖市では、一体どれ位死んでゐるかを調べて見ると一万七千八百八十七人となつてゐる、その内男は九千七百六十六人、女が稍少く八千百二十一人で、これを州別に見ると、サンパウロ州生れの者一万千三百四十六人、他州者千三百四十九人、イタリー人千九百九十三人、ポルトガル人千百〇一人、その他二千九十八人となつてゐる、更にこれを死亡年齢から見れば、二拾歳以下の者がその大部分を占めてゐる、伯國五大都市の中で最も氣候よく健康地とされ、毎年の死亡率も斷然少い聖市でこの數字が示す事實には深しも强く考へさせられるであらう、春秋に富む二十才以下の者が死亡者の大部分を占めてゐる原因には種々あるであらうが第二の國家、明日の伯國へ進軍する若き力を無駄にも散らす事は、國家にとつて何動にも替へ難い損害であらねばならぬと凡ての識者間に注目されてゐる

## 國際觀光局を擴大

### 南米にも事務所を新設

國際觀光局の發展とともに母國鐵道が國際觀光局の機能を一時停止か縮小の餘儀にたつてゐたが、戰時下なればこそ母國の國情を宣傳せねばならぬといふ輿論からむしろ事業を擴張し積極的に活動することに決定、豫算も十五年度百六十万円であつたものが百九十万円に增額され、光日本の實績を上げることになつた、先づニューヨーク、ロスアンゼルス、ロンドン、パリー、香港、北京、上海、奉天等に海外事務所を擴張する一方、さらにリオ、ブエノスアイレス、マニラ、シドニー、メルボン、ベルリン、ローマ等に海外事務所を新設、またすでに結成されてゐる日獨伊觀光同志會の活動によつて歐洲各國をはじめ、中央アジア諸國と東西共榮圏内のラン印その他から外客を誘致し日本の東亞の盟主たることをはつきり認識せしめやうとするのである

## 長谷川敏子孃

### 奥地旅行の日程決る

既報――奥地邦人慰安の目的を以て「愛の行脚」に廻る歌姫、長谷川敏子孃のノロエステ線出演日程は、來る十二月三日リンス（青年會主催）五日、カフエランジヤ（日會主催）七日プロミッソン（日會主催）九日アラサツーバ（日會主催）興行の豫定である、尚リンスは青年會館、當日午後八時より入場券は青年會館で前賣（十五銭）して居る

## 日本美術史について

### ミランダ君の南米向放送

訪日學生團々長として憧れの日本を訪れたマリオ、ミランダ氏は、他の團員が視察見學を終へ全部歸伯して後も氏一人は踏み止まり、戰時下日本の縷々しき姿を縱ゆる角度より見究める事に專念してゐる

日本美術史についてミランダ氏（獨得の日本美術觀を發表してゐる（寫眞はマリオ、ミランダ氏）

日本美術史には日本美術の研究には異常な熱心さを見せてゐる、去る二十四日午後六時四十五分には（南米向―ZI・九五三五キロサイクル・三一米三六の波長）マイクを通じ、約十分間が、殊に日本美術の研究には異常な熱心さを見せてゐる、去る二十四日午後六時四十五分には（南米向―ZI・九五三五キロサイクル・三一米三六の波長）マイクを通じ、約十分間

## 進軍する伯國水泳界

### 一擧四つの南米新記録樹立

### 女流選手コーチンニヨ孃の殊勳

伯國の女流水泳選手ピエダデ・コウチンニヨ孃は、廿三日午後リオ市グワナバラ漕艇クラブの五十米プールで、五百、八百、千、千五百米各自由型と一擧四つの南米新記録を樹立、伯國女流水泳界の雷め、萬丈の氣焔を吐いた、レコードを示せば左の通りであるが、最後の千五百米は、チリーのフランカ・フレッド孃保持の南米記録廿四分廿七秒を破り、デンマークのフヴエジエール孃の世界記録廿一分四五秒七に迫る堂々たるものである

同孃は既に三百、四百の南米記録保持者であるが、來る十二月更に百、二百米自由型記録の更新に乘出す事になつた

當日の記録は五百米自由型七分一秒八八百米自由型十二分五七秒三千米自由型十四分四四秒二千五百米自由型廿二分十一秒八

## 日本式飾附終へ

### 二針店主ペピ氏

### 内外新聞記者を招く

聖市ヂレイタ街とジヨゼ・ボニファシオ街にまたがる、所謂「二針店」で通つてゐるお馴染のカーザ・レウニーダス店主ペピ氏は、過般日本から澤山の商品を買ひ込んで歸伯したが、近づくナタールを當込んで店内を日本式に飾附けを急いで居たが、この程漸く完成したので昨夜六時半から内外新聞記者を同店に招待コクテルパーテーを開いた、外人側はコレイオ・パウリスタ新聞社長ドクトル・セーザル氏祝辭を述べ、邦人側では特別出席の總領事代理成瀬領事の祝辭を齋藤副領事通譯で述べた

御來賓中の大橋畫伯夫妻も來聖して居た

## リオの個展を終へ

### 大橋畫伯夫妻着聖

の前來社は眞寫
妻夫橋大

一先づアベニーダ・サンジヨオン・マルチネリービルのホテル・サンベント千百十六號室に落付き、少憩の後各方面へ挨拶廻りに出かけた、聖市は日本語の上手なエレナ夫人は交渉に記者に對し大橋氏及び

Redação - Rua Fagundes, 196
Telephone 7-1670
Caixa Postal, H
Director M. Samesima

# NOTICIAS DO BRASIL

Proprietario SEISAKU KUROISHI

Assignatura Anno.... 60$000
" Semestre.... 30$000
Numero de dia.... 300 reis
Gerente S. Kuroishi
Redator-chefe M. Yendo

ANNO XXIII — S. PAULO — TERÇA FEIRA 26 de NOVEMBRO de 1940 — DIARIO No 2342

# Política Mediterranea

Já assinalámos, em várias notas anteriores, que os governos totalitários defrontados pela resistência inglesa desviaram para os Bálcans as suas atividades, com o intuito de ferir a Grã-Bretanha, não em carne própria, mas indiretamente, por meio da supressão das suas rotas de abastecimentos.

No deslocamento do teatro de operações, consequente ao citado desvio de atividades, a Alemanha remeteu tropas para a Rumânia, a Itália começou manobras de invasão contra a Grécia, o general Graziani suspendeu a execução dos seus planos na Africa e o sr. Hitler deu início a uma ampla re-elaboração da diplomacia estratégica que vinha pondo em prática. Por fim, o Reich obteve a adesão da Hungria à política do eixo, percebendo-se, ademais, que já não deveria tardar muito em conseguir tambem a adesão da Rumânia (coisa, que de esto, aconteceu ontem).

As manobras diplomáticas do sr. Hitler, como se vê, desenvolveram-se com êxito, e mais ou menos rapidamente. Sua finalidade última, ao que ure e, seria fazer com que a Turquia abandonasse, uma vez por todas, o estado de não-beligerância e a atitude de simpatia para com a Inglaterra. Com isto, Berlim não somente deteria as aspirações mediterrâneas da Rússia, através do Mar Negro e dos Dardanelos, como tambem eliminaria, em grande parte, sem dúvida, o tráfego de matérias-primas, de viveres e de combustível, que vai para Londres partindo da Síria, da Palestina e do canal de Suez.

Ao que se supõe, o papel da Itália à margem das manobras diplomáticas da Alemanha nos Bálcans, seria o de reduzir a Grécia à obediência totalitária, afim de, com o êxito das armas, facilitar o trabalho alemão de conquista pacífica da Turquia. A Grécia porém, além de resistir à pressão dos exércitos italianos, passou para a offensiva, ao que informam os diferentes serviços telegráficos do exterior, e Roma não desmente as adversidades que se lhe atribuem. O sucesso dos gregos, como esclarecemos em notas anteriores, poderá ser transitória, á vista da desproporção numérica existente entre a população e os exércitos da Itália e a população e os exercitos do rei Jorge. Todavia, transitório ou não, tal sucesso anima os turcos a resistir tambem no caso de serem alvo de qualquer ataque. Isto dificulta a obra diplomática do Reich, reforça as simpatias de ancara para com Londres, leva o Egito a consolidar sua posição e prolonga a sua influência até ao ponto de colocar os próprios franceses de Vichy em atitude menos passiva.

Seria afoiteza deduzir, por tais episódios, que a marcha totalitária na Europa e no Oriente Médio, sofreu um colapso; mas é certo que essa marcha entra em fase de dificuldades ou pelo menos de embaraços, que podem não ser decisivos, mas que retardam, evidentemente, as vitórias parciais tomadas de mira.

As conveniências da Inglaterra não exigem que a Turquia entre em luta contra a Alemanha e a Itália; bastar-lhes que Ancara prossiga na conduta que adotou. Evitando que os turcos deguem em armas e formem do lado oposto ao seu, e concorrendo para que os gregos resistam à invasão italiana, os ingleses reforçam o moral do império e estimulam as simpatias norte-americanas.

E' facil perceber as consequências que daí decorrem. Os meses se passam, uns após outros, e não se afigura de todo infundada a esperança britânica de que o tempo venha a ser um dos seus grandes aliados. Para que a esperança inglesa se dilua, é preciso que a Itália retome a ofensiva, leve a Grécia à derrota, sinão por meio de guerra-relâmpago, pelo menos por via de uma ação continua e feliz, e consolide com o êxito das armas a qualidade certeira das manobras diplomáticas que o sr. Hitler concebeu.

No Mediterrâneo, como se vê, está situado, não o «pivot» principal da conflagração européia, mas sim um dos seus pernos de relevante importância.

## Minérios Paulistas

O Interventor Adhemar de Barros fez entrega ao prisidente Vargas do primeiro lingote de chumbo, extraido da usina montada pelo governo de São Paulo em Apiaí, no Vale do Ribeira. No ato da entrega o interventor paulista deu ao chefe da Nação pormenores expressivos sôbre nossa produção atual de chumbo e prata. Usina do Apiaí já está refenando, diariamente dez toneladas de chumbo cêrca de trezentos quilos de prata.

A' Usina do Apiaí é uma das mais felizes iniciativas do atual govêrno. Seu significado economico é evidente. O Vale do Ribeira é excepcionalmente fértil em minérios de diversos teores. Se explorados racionalmente, podem ser dos mais seguros elementos de propulsão da economia paulista.

Montando a Usina do Apiaí, o govêrno do Estado dá o primeiro passo para um aproveitamento industrial intensivo dos minérios da região, através da iniciativa particular. E isso virá. Ponto era começar a exploração racional dos minérios demonstrando, como o fêz o govêrno, que essa exploração pode ser feita em condições comerciais.

E' oportuno acentuar que a Usina foi montada e posta em funcionamento por técnicos paulistas. Todos os trabalhos obedeceram á orientação do Instituto de Pesquisas Tecnológicas ora sob a direção do engenheiro Adriano Marchini.

Em todo o território brasileiro, é a primeira vez que se monta uma usina, para exploração de de minerios de chumbo e parte, nas condições referidas. E é evidentemente em São Paulo que irá se estabelecer sua exploração industrial, o que trará sensiveis beneficios para o desenvolvimento econômico do Estado.

LEIA O NOSSO
KODOMO NO SONO
Supplemento do jornal "Noticias do Brasil"

## VISITA DO MINISTRO DA AGRICULTURA AO ESTADO DE MATTO GROSSO

### CONSTRUCÇÃO DA RODOVIA CUYABA'-VILHENA

RIO, 23 — Pelo telephone — Ao Ministerio da Agricultura chegou a communicação de que o ministro Fernando Costa recebeu ante-hontem em Cuyabá grandes homenagens, tendo o Interventor Julio Muller offerecido a s. exa. e comitiva um banquete ao qual compareceram os elementos de destaque da capital. A festa alcançou brilho memoravel devido especialmente ao discurso do chefe do governo matogrossense, que analysou a actuação do sr. Fernando Costa como secretario da Agricultura de São Paulo e ministro da Agricultura, pondo em relevo os serviços que o mesmo já prestou ao Estado de Mato Grosso como o aprendizado agricola, a estrade Cuyabá-Vilhena em cooperação com o Exercito, os estudos das minas de Urucumaquan, etc.

O Interventor Julio Muller se referiu tambem nominalmente a cada membro da comitiva presidencial. O ministro Fernando Costa agradeceu com um discurso no qual abordou os principaes problemas economicos do Brasil, salientando o esforço do governo pelo fortalecimento do nosso paiz em bases solidas e racionaes. Nessa occasião o general Rondon levantou o brinde de honra ao Presidente Getulio Vargas, chamando-o de reconstrutor da Republica, politico sagaz e homem severo que procura solver os nossos problemas dentro da realidade brasileira.

Hontem o ministro da Agricultura visitou a usina «Maravilha», de propriedade do coronel Paes de Barros, iniciando a viagem de regresso ao Rio após o almoço até Porto Esperança.

Os criadores de Nhecolandia convidaram o ministro da Agricultura para visitar as fazendas dessa zona do Estado, sendo possivel que s. exa. atenda ao pedido.

Depois da visita aos campos do «Mimoso» o titular da Agricultura pretende enviar para essa região 150 reproductores equinos de boa qualidade, afim de melhorar seus rebanhos de cerca de 8 mil cabeças, produzindo-se alli todos os cavallos de que necessita a nossa defesa militar. Telegrammas do agronomo Mario Viheine, secretario do Serviço de informação Agricola, ora integrado a comitiva ministerial, adianta que no dia 25 será collocado em Rosario Oeste o marco inicial da rodovia Cuyabá-Vilhena, estrada que possibilitará a ligação de Mato Grosso com a Estrada de Ferro Madeira-Mamoré. Essa rodovia terá uma extensão de 800 kilometros, devendo cada kilometro custar apenas 8 contos de réis. O ministro Fernando Costa e o general Rondon serão representados nesse acto pelos srs. capitão Luiz de Paula Pessoa, commandante da 4.a companhia rodoviaria e o chefe da commissão constructora da estrada, a qual se acha aparelhada para concluir com exito a obra projectada pelo ministro Fernando Costa.

## AVIAÇÃO NACIONAL

POR FORÇA DAS SUAS CONDIÇÕES GEOGRAFICAS, O Brasil tem de dispensar os maiores desvelos á sua aviação.

O Correio Aéreo Militar, que tomou incremento extraordinário, constitue exemplo a ser imitado. Até bem poucos anos, Goiás e Mato Grosso eram terras remotas, perdidas nas distâncias imensuráveis. As emprêsas de transportes aéreos e a aviação militar têm combatido com êxito êsses males.

O Presidente Getulio Vargas é um entusiasta da aviação, como ninguém ignora. Suas viagens aéreas são constantes. Era natural que o Govêrno desse, pois, a maior importância ao desenvolvimento da aviação civil e militar, antes mesmo que os episódios da guerra européia frisassem a necessidade disto.

Dispondo de pilotos destros e competentes, no Exército e na Marinha, e com uma juventude militar e civil que se aplica com entusiasmo ao estudo da aviação, acompanhando-lhe os rápidos progressos, o Brasil não poderia descuidar-se dos problemas vinculados ao futuro do seu aparelhamento de defeza. Daí o ato do Presidente Getulio Vargas destinando o crédito de cinco mil e quinhentos contos para a montagem de uma fábrica de motores de aviação.

Sem isso nada poderíamos fazer de profícuo. Quem quer que examine as nossas condições geográficas, com núcleos populosos separados por enormes distâncias, com um litoral imenso e extensíssimas fronteiras terrestres, avalia e compreende os esforços para criarmos uma aviação poderosa. O Estado Novo tem pôsto a necessidade de tratarmos seriamente dos problemas da defesa nacional de compreensão comum. Ao mesmo tempo, o Govêrno sempre articula o robustecimento dos órgãos de defesa com o fortalecimento dos órgãos que estimulam a opulência coletiva. O país sabe que o Presidente Getulio Vargas acompanha os esforços de quantos fomentam as fontes de nossa grandeza. Os planos de desenvolvimento dos transportes, visando duplamente o nosso progresso e a nossa segurança, vêm sendo executados com pertinácia. O crédito para as obras duma fábrica de motores destinados á aviação constitue mais uma prova disto. Estamos num reigne de realizações imediatas.

## ASPECTOS HISTORICOS DO ESTADO NOVO

SILVIO PEIXOTO

( 3 )

Sim, qualquer ataque, porque a hipótese de uma ação direta do Brasil contra quem quér que seja é tão inimaginável que o mais bronco de todos os insufladores de confusão não é incapaz de veiculá-la.

O Brasil viveu e viverá em paz, bastante leal para não agredir, bastante forte para não ser agredido.

Nossa riqueza econômica, nossa vastidão territorial, nossa escassa densidade de população constituem estímulos permanentes à cobiça — estímulos que poderão transformar um perigo latente em indesejável realidade se não estivermos preparados para a tarefa suprema de defender a nossa própria integridade.

E' somente nesse sentido que o Brasil se garante militarmente, sob o chefia do Presidente Getulio Vargas. Em vez de planos mirabolantes ou de surtos intermitentes, estamos realizando uma obra serena e progressiva de adaptação do nível militar ao nível econômico do país.

Uma nação que representa a décima quinta parte do globo terrestre, que tem população superior à da metade da América do Sul, que é a principal fornecedora de vários produtos, não pode ficar com seus milhares de quilômetros de costa, expostos ao mais absoluto desabrigo.

Firme na sua adesão aos postulados de concórdia, a República brasileira continuará fiel à sua própria tradição, reservando-se, não obstante o direito e o dever de acompanhar as tendências do momento internacional e de trabalhar fecundamente, tanto na esfera civil como na esfera militar, para que não haja injusto desequilíbrio entre as duas metades componentes da nação.

De modo que, no futuro, o historiador que quiser ter uma visão panorâmica do aparelhamento bélico do Brasil, terá de acentuar o contraste entre a apatia da República velha e do Império, quebrada por um ou outro lance de renovação parcial, e o ressurgimento absoluto do espírito cívico do Govêrno Getulio Vargas, através da concessão do equipamento a que as classes armadas têm incontestável fundamental direito.

A inexistência ou a insuficiência dêsse equipamento equivale a condenar as classes armadas ao sacrifício inglório, em cujo vórtice também se arrastaria o sacrifício da Pátria.

Em última análise, o militar é o defensor nato da integridade nacional, porém, defendê-la não implica em caminhar a peito descoberto ao encontro dos perigos.

Tudo quanto tem feito, portanto, o Presidente Getulio Vargas em prol do aparelhamento militar do país, tem o sabor de inapreciável benefício, cujas proporções só o futuro poderá exatamente medir.

Mas passemos à linguagem dos fatos.

# Da Independência ao Estado Novo

( 3 )

Transpondo para o Brasil o federalismo dos Estados Unidos, os constituintes de 1891 adotaram-lhe igualmente o presidencialismo. E' evidente a correspondência entre os dois princípios. O presidencialismo, concretizando a pureza doutrinária da separação dos poderes públicos, tão vã na prática, serve de natural equilíbrio ao federalismo, pois se êste representa, de algum modo, uma dispersão de fôrças nacionais, aquele implica uma concentração da autoridade central. O presidente da República, na formação e orientação do govêrno, liberta-se, teoricamente pelo menos, do Parlamento, podendo, pois traçar e executar, por própria conta e responsabilidade, os mais largos programas administrativos. Veremos em breve se foi esta a situação do Brasil até 1930.

Não nos propomos a fazer a exegese do texto da Constituição de 1891; limitamo-nos a uma impressão de conjunto. Inspirando-se no liberalismo em voga, ela não podia esquecer um capítulo especial sôbre os direitos do cidadão, onde se repetem as afirmações já tradicionais da liberdade do indivíduo em contraposição ao Estado. O sufrágio popular e direto era a regra geral para os cargos representativos, inclusive a presidência da República e o Senado Federal. Todavia, foi vencida a corrente positivista que não permitia sequer a excepção dos mendigos e analfabetos. A liberdade religiosa deve ser lembrada como uma das conquistas mais fecundas da constituição de 1891, e devida em grande parte à propaganda dos positivistas. A Igreja Católica, a que pertencia a formidável maioria dos brasileiros, ainda ferida nos últimos anos do Império pela política regalista de Pedro II, consolidou na liberdade dos cultos a sua privilegiada situação.

A organização judiciária e a distribuição das rendas públicas incluiram-se entre os assuntos que mais vivos debates mereceram da Constituinte de 1891. A corrente dos que desejavam a dualidade do direito substantivo, como nos Estados Unidos, foi facilmente vencida, prevalecendo a unidade da legislação com a dualidade do processo e da magistratura. Ao Supremo Tribunal reservou-se a inconstitucionalidade das leis. Estendeu-se também ao máximo a proteção do habeas-corpus.

Em nenhum capítulo mais do que no relativo à discriminação das rendas se mostrou tão exigente o espírito regionalista. Mal deixavam os federalistas de primeiro plano o imposto de importação ao Govêrno Federal. As demais fontes possíveis da receita pública caberiam, primacialmente, aos Estados. Ficou afinal triunfante a corrente chefiada pelo antigo ministro da Fazenda do Govêrno Provisório, Rui Barbosa, que salvava a União. União da indigência econômica. O ante-projeto do Govêrno Provisório dava, em síntese, à União os impostos de importação e de sêlo, as taxas telegráficas e postais, ficando os outros com os Estados, mas devendo êstes exigidos em determinado prazo os de exportação. Os Estados poderiam tributar a importação, revertendo o produto à União. Muitos outros sistemas foram propostos na Constituinte, e em regra no sentido de servir aos interêsses fiscais dos Estados. O texto definitivo da Constituição consagrou o sistema do projeto governamental, desaparecendo a futura extinção dos impostos de exportação e estabelecidos os princípios de igualdade da tributação federal para todos os Estados, da proibição dos impostos de trânsito sôbre os produtos dos Estados e da competência cumulativa da União e dos Estados para criar outras fontes de receita, não expressamente discriminadas na Carta constitucional.

Preocupados em demasia com os interêsses estaduais, os constituintes de 1891 mostraram-se menos ciosos quanto aos dos municípios, cuja autonomia, nos negócios locais, era enfaticamente proclamada. A representação diplomática ou, vale dizer, a política exterior, foi entregue plenamente à União. O mesmo verificou-se quanto ao Exército e à Marinha de guerra. Mas nestes próprios setores não faltou quem se propuzesse a melhor armar os Estados. As polícias militares autônomas dêstes ficaram como viva reminiscência dos exageros federalistas...

* * *

Resumida a Constituição de 1891, na sua estrutura teórica, vejamos agora como foi ela praticada.

O regime republicano pagou o seu esperado tributo de lutas civís, que culminaram na revolta da Armada e na Revolução riograndense. Consolidada a ordem pública no govêrno do marechal Floriano Peixoto, a vida política do país pôde entrar em pacífico funcionamento. Não é exagêro afirmar que jamais foi possível perfeita adaptação das instituições constitucionais às realidades brasileiras. A monarquia, bem ou mal, criara dois grandes partidos que se revezavam no poder. A República, os desfez sem dar-lhes sucedâneos. A política, perdido o sentido de disciplina, fraccionou-se de Estado a Estado. Estes, fortalecidos na aurora da sua nova autonomia, que, de bom grado confundiam com soberania, julgavam-se poderes rivais do da União. Entretanto, a desigualdade das suas condições demográficas e, sobretudo, das suas condições econômicas, de pressa os dividiu em dois grupos distintos: o dos grandes Estados, que tudo podiam, tudo impunham, e o dos pequenos Estados, sujeitos à órbita dos mais poderosos ou adstritos à direta proteção do Govêrno federal. Quando o Presidente Campos Sales quis executar o plano de restauração financeira da União, teve de apoiar-se nos governos estaduais existentes. Esta espécie de aliança entre a União e os grandes Estados, que dominavam o Congresso Federal pelas suas numerosas bancadas na Câmara, gerou logicamente a tendência para as oligarquias.

NOTICIARIO ESTRANGEIRO DO «NOTICIAS DO BRASIL» FORNECIDO PELA AGENCIA TELEGRAPHICA «DOMEI» JAPONEZA

附録二種つき婦人倶楽部 十月號が到着しました

實用毛糸編物全集

別冊附録 編物の長持ちと繕ひ方

附録 燃料と食品の經濟寶典

評判記事

評判小說

婦人倶楽部 十月號には 此の外 記事澤山あり 當地書店一同

時報商事部

◇カビン・ゴルドーラ 二、〇〇〇
◇ジャラグア 二、〇〇〇
◇ロデス 七、〇〇〇
◇カビン・センプレベルデ 一〇、〇〇〇
◇アルファファ・リオグランデ 三、五〇〇
◇アルファファ・ブラジレーラ 一包二〇瓦 五、〇〇〇
◇アルファファ・ムルシア 百瓦 三、〇〇〇
◆牧草苗類
◇カビン・キケヨー 百本 一五、〇〇〇
◇カビン・インペリアル 同 一〇、〇〇〇
(別名ベネズエラ、コロンビア)
◇カビン・エレファンテ 同 一〇、〇〇〇
◇コンソリダ(豚用) 同 三五、〇〇〇
◇カビン・センプレベルデ 同 二〇、〇〇〇

此處では高産を離れて堅實の農業は出來ない